日本女医会誌
復刊第135号
題字　吉岡弥生

巻頭言

副会長　白橋美笑

平成五年度日本女医会総会は、第5回国際女医会西太平洋地域会議が五月二十日―二十二日に京都で開催されたのに引きつづき、二十三日午前中にホテル京阪で評議員会が、午後、アバンティホールで総会が開催されました。

＊

国際女医会西太平洋地域会議の開催に当っては、山崎倫子会長の陣頭指揮のもとに、組織委員長佐藤千代子副会長の募金集めと組織作りに始まり、また京都開催のため、京都支部長松本文絵先生に格別のご協力をお願いしました。松本先生はご多忙の中国際会議に京都のすばらしい持ち味を十二分に発揮するために、本部の理事会にご出席のため、たびたび上京され、本部役員も下見、打合わせのため、二度京都を訪れました。松本先生はもとより、京都在住の多数の女医先生方の献身的なご協力に心から感謝申し上げます。

全国の先生方からも募金にご協力してくださいまして、当初の募金目標額に近い額に達しました。おかげさまで、西太平洋地域会議も大成功に終りましたが、女医会全員が一丸となって、目的達成にご協力くださいました賜と存じます。本当にありがとうございました。

＊

二十三日の日本女医会は十時からホテル京阪で評議員会が、一時からアバンティホールで総会が開かれ、議事は原案どおりご承認いただきました。

日本女医会をブロック別に十区分し、支部間の交流を密にし、また役員もなるべく参加し、会員の増強や年金の加入なども説明して、コミュニケーションを密にして行きたい。これに対して、通信費の件について質問がありましたが、これは本部で負担することに決定しました。

表彰に関しましては、

吉岡弥生賞　倉島摂子先生

荻野吟子賞　今野タイ先生

が受賞されました。

学術研究助成については、小国美也子、楠元雅子、佐中真由美、武内ゆみ子、田中悦子、蓮沼智子の六先生が受けられました。

受賞者の方々が各自原稿を寄せておられますので、その内容についてのご紹介は省略いたします。

最後になりましたが、平成六年度の総会は役員改選の年ですので、東京で開催されます。たくさんの方々のご出席をお待ちしております。

次々期（平成七年度）は埼玉県が快くお引きうけくださいました。埼玉県支部長関根先生は、今から張りきっておられます。なにとぞ、よろしくお願いいたします。

国際会議と総会が無事大成功に終りまして、嵐の後の静けさと申しましょうか、ホッとしております。これも皆さま方のご尽力あればこそで厚く厚く重ねてお礼申し上げます。

もくじ

巻頭言……白橋　美笑（1）
第38回日本女医会定時総会
会長挨拶……山崎　倫子（2）
第38回定時総会に出席して……甲子万里子（3）
定時総会議事録……（3）
〈各賞と研究助成授与〉
吉岡弥生賞を受賞して……倉島　摂子（4）
荻野吟子賞をいただいて……今野　タイ（4）
学術研究助成を頂いて……小国美也子（5）
学術研究助成金をいただいて……楠元　雅子（5）
学術研究助成をいただいて……佐中真由実（5）
学術研究助成を受けるにあたって……武内ゆみ子（6）
学術研究助成を賜わり……田中　悦子（7）
学術研究助成をいただき……蓮沼　智子（7）
第5回国際女医会西太平洋地域会議
国際会議を終えて……山崎　倫子（8）
会議は終る……佐藤千代子（8）
国際女医会西太平洋地域会議の開催地を
お預りして……松本　文絵（10）
第5回西太平洋地域会議を終えて……学術部（10）
武田病院見学に参加して……矢崎　宏子（11）
東山ササトリウム見学の記……田中　蘭子（12）
東山ササトリウム第二班……稲生　襄（13）
胸にこみあげるもの……土屋　和子（13）
このパワーを若い人へも……阪口　昌子（14）
ナイト・ツアー印象記……佐々木和子（14）
哀悼・三好美春先生……（12）
理事会議事録……（15）
評議員会議事録……（16）
会員動静……（16）
編集後記……（16）

第38回日本女医会定時総会

会長挨拶

会長　山﨑倫子

本日は全国各地より多数の皆様のご出席有難うございます。まずはじめに第5回国際女医会西太平洋地域会議が海外より七六名国内二四七名計三二三名のご参加を得て昨日成功裡に終りましたことは、誠にご同慶の至りでございます。

このたびの会員皆様の多大なご協力とご支持に対し深く感謝申上げます。特に今回西太平地域国際会議に引きつづいての総会に松本文絵支部長先生並びに京都支部会員の皆様には格別のご協力を戴きまして有難うございました。

昨年の第三十七回定時総会は香川県支部のご尽力によって盛大に催され、また思いがけない行事の数々で大変楽しい思い出を作っていただき感激でございました。総会後直ちに国際会議の準備をはじめ、組織委員会を結成、一同熱心に取り組んで参りました。すべて満点とまではいかなかったかも知れませんが、学術、運営そして社交（ソーシャルプログラム）行事においても意義ある楽しい国際会議にすることが出来たと思っています。ご参加下さいました皆様いかがでございましたでしょうか。西太平洋地域会議は三年ごとに地域の六つの国が順番で受け持っていきます。次の主催国はニュージーランドで一九九六年オークランド市において開かれます。再び日本に廻ってくるのは十八年め、中華民国が加盟すれば二十一年めということになります。

世界中が集まる国際会議は一九九五年五月オランダのハーグで、その次が一九九八年、ケニヤのナイロビと決まっております。

今回の西太平洋地域会議を終えて、いろいろご批判もまた反省すべきこともあろうかと存じますが、今はただ〝よかった!!よかった!!〟とご協力下さいました会員の皆様、ご参加下さいました皆様に心から、有難うございました、とお礼を申上げる次第でございます。

この一年間募金活動にはじまる国際会議の準備に追われ、目新しい事業に取り組むことが出来ませんでしたが、年度当初にお諮り致しました事業計画はほぼ滞りなく実行することができましたことをご報告申上げます。

一九九三年度を迎え、今真剣に今後の女医会のあり方を考えなければならないと思っております。女医会会員の高齢化と折角入会なさった若い会員が次々に退会してゆかれ、会員の増強を願っている執行部と致しましては誠に残念なことと心を痛めております。評議員会にも一つの案としてお諮りしましたが女医会のブロック化はいかがなものでしょうか。つまり現在の政治のように中央集権的なあり方から脱却して、会員及び支部あっての本部であるという初心に戻り、地域の活性化、地域会員の交流と親睦を通して会員の増強を願い、それぞれの地域における問題点、ニードに対応、地域社会に貢献できるよう女医にリーダーシップを発揮して頂き、全会員の支部またはブロック活動を期待するものであります。さらに近隣支部、本部とのコミュニケーションを密にし、本部が経済的バックアップや事業の後援を行う等効率が大で緻密な社会還元に励んでゆけたらと考えております。

次に女医年金について経過報告をさせて頂きます。非常に利益率の高い有利な年金としてお奨めして参りましたが、折しも好景気に浮かれていた経済が一転、バブルがはじけ、かつて経験したことのないほどの経済不況に落ち込んだことはご承知の通りであります。幸にして日本女医会の年金の運用は非常に堅実で、他の年金とは比べようもなくよい水準を保っておりますが、それでも当初ご案内したような金利8・9％には今後到底参りませんことをご理解頂きたいと存じます。昨年来何回も担当事業部、庶務、会計、会長、副会長等安田信託と会合を重ね、見直しと将来の見通し等検討して参りましたし今後もよりよい方向を目指して検討を続けて参ります。現在の状況下では最も有利な年金であることを重ねて申上げ、今後共よろしくお願い申上げます。

第5回西太平洋地域会議という大事業を終え、執行部は真剣に今後の女医会のあり方を検討し、女医会に参加していることが楽しいといえるような会へと努力していきますことを新年度の目標といたします。

さて今年度の吉岡彌生賞につきご報告申上げます。従来から学術面でのご貢献と社会に貢献なさった方のお二人に授与いたしておりますが、今回は学術面でのご推薦がなく誠に残念でございました。

今回の吉岡彌生賞受賞者は、中野支部の倉島攝子先生です。

倉島攝子先生は昭和十九年帝国女子医学専門学校（現東邦大医学部）のご卒業です。昭和三十九年元日本女医会会長龍智恵子先生及び帝国女子医専同窓会である鶴風会が設立なされた東京小児療育病院及び脳性マヒ研究所に対し設立当初より力強い協力者として関わってこられ、昭和三十九年法人化された社会福祉法人鶴風会の評議員、四十一年に理事、さらに四十九年には常務理事にご就任、五十七年六月には同会理事長の重任に就かれました。この間理事としては小児マヒ児を守る会の財団化に尽されると共に実際の相談事業や啓蒙活動のため広く全国にまたがり講演活動をつづけられました。この財団はその役責を終了し解散、現在はもっぱら福祉法人の事業である療育病院とみどり愛育園の医療福祉施設を柱として活動を続けておられます。これらの運営には計り知れない財政的及び経営上の困難がございますが倉島先生はとかく社会の一隅に苦しむ脳性マヒ児及びその家族たちの支えとなり二十余年にわたり蔭の力となって福祉施設の経営を強固にし発展に努めてこられました。

倉島先生の日夜につづくご健闘に敬意を表し吉岡彌生賞をお贈りいたします。

荻野吟子賞は、北海道最北端の僻地において昭和十八年以来、ある時はお父上を助け、ご結婚後はご主人と共に、お二人の没後もただ一人佐呂間町において地域医療を続けておられます、昭和十五年東京女子医学専門学校卒業の今野タイ先生にお贈りすることにいたしました。昭和五十一年には勲五等瑞宝章の叙勲を受けられ、その他数多くの賞をも受けておられますが、僻地というだけではあまりにもきびしい最果ての地に五十年にわたり地域保健にご貢献の今野タイ先生にあえて荻野吟子賞をお贈りする次第です。

第13回日本女医会学術研究助成については九名からの応募がありました。いずれも大変優秀で時代の先端をゆく研究が若い女医学徒によって行われていることは大変よろこばしいことであります。何分にも助成の枠があるため、選考委員七名が十分検討の結果次の六名の方に決定いたしました。

◇武内ゆみ子（東京大医学部）VLA－4, VLA－5分子の造血・リンパ球分化に果たす役割◇蓮沼智子（聖マリアンナ医大）慢性関節リウマチの病因遺伝子に関する研究◇小国美也子（東女医大）歌舞伎メーキャップ症候群に関する遺伝子工学的基礎研究◇佐中真由美（東女医大）糖尿病におけるポリオール代謝の研究―特に妊娠時における 1,5-anhydroglucitol（1,5－AG）の血中・尿中動態に関して―◇楠元雅子（東女医大）高齢者心疾患の薬物療法に関する研究◇田中悦子（慈恵医大）心筋細胞内Ca動態の温度依存性に関する研究

（　）内は提出校でありますが、本日武内ゆみ子先生はご欠席、他の五名の方はご出席になりました。

皆さんの研究の成果をご期待申上げ、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

第38回定時総会に出席して

墨田支部　甲子万里子

国際女医会西太平洋会議が二十二日無事終了し、二十三日（日）は午前中ホテル京阪桜の間で開かれた評議員会にひきつづき、アバンティホールのメイン会場で午後一時より第38回定時総会が開かれました。三日間昼は会議で夜はパーティがつづき、お疲れになった先生方がいらっしゃったせいもあってか、出席者が割に少ないようで、広い会場がいささか淋しい気もいたしましたが、会長先生はじめ執行部の先生方、三日間ご参加なさった先生方、一様に大きな仕事をなし終えた事にほっとした安

定時総会議事録

日時　平成5年5月23日（日）

場所　京都市アバンティホール（京都市南区東九条西山王町31番地アバンティビル9階）

司会　石原　幸子

出席数　二七七〇名

会員数　一〇九名

記名委任数　七一七名

白紙委任数　四三一名

以上のとおり日本女医会定款第27条の定足数に達し、総会が成立する旨の報告あり開会を宣す。

山﨑　倫子

会長挨拶

物故者への黙禱

平成四年度物故会員に黙禱

報告

一、会務および事業報告　南雲　君代

配布ずみの資料にもとづき報告。

二、平成四年度特別会計報告　佐々木和子

吉岡弥生賞基金会計

国際女医会議記念事業基金会計

年金会計

ルーペンダン会計

以上について配布ずみの資料にもとづき報告。

三、国際連絡書記報告　野本照子

議長団選出

関根みよ、角田智恵子、久田たか（議長団、議長団席に着席）

議事録署名人選出

渡辺政子、甲子万里子

議事

第1号議案

(1) 平成四年度一般会計収支計算書　栗原　久子

配布ずみの資料にもとづき報告

――原案どおり可決

(2) 剰余金処分案　栗原　久子

――次期会計へ繰り越すことを原案どおり可決

会計監査報告　土井　淑江

監査の結果適法かつ正確であることを認める旨の報告あり。

第2号議案

平成五年度事業計画案

庶務部　佐藤千代子

会員増加推進

地域別ブロック制の設定

吉岡弥生賞

事業部　佐藤千代子

医療過疎地診療奉仕活動への助成

公衆衛生活動

支部助成

荻野吟子賞

年金

ルーペンダン

社会保険新報社への原稿協力について　月刊「いきいき」

三井健保組合機関誌への原稿執筆

渉外部　佐藤千代子

国内および国際交流

広報部　佐藤千代子

機関紙の発行

学術部　田中　蘭子

研究助成

講演研修会、ワークショップ

以上

庶務部地域別ブロック制については検討の結果、本年度は提案するにとどめ、継続審議とする。その他事業計画案については原案どおり可決。

第3号議案

平成五年度一般会計収支予算案

青井　禮子

――原案どおり可決

第4号議案

次期及び次々期総会開催地について

次期開催地　山崎　倫子　東京

次々期開催地　埼玉支部

――原案どおり可決

表彰

(1) 吉岡弥生賞受賞者　倉島　攝子

(2) 荻野吟子賞受賞者　今野　タイ

(3) 学術研究助成金授与者

小国美也子　楠元　雅子

佐中真由実　田中　悦子

蓮沼　智子　武内ゆみ子

閉会の辞　野呂　幸枝

午後3時閉会

堵の表情があり、いつものちょっと緊張した空気とちがって、なごやかな雰囲気で総会がはじめられました。

まず山崎会長の挨拶があり、会員の皆様のご協力で西太平洋会議がとどこおりなく盛会に大成功に終了できた事への感謝の言葉がありました。ついで物故会員への黙禱のあと、議長団議事録署名人の選出があり、各議案は万場一致で議決され、おわりに京都支部長松本先生より開催までのご苦労話があり、山崎会長より感謝の言葉があり、順調に閉会となりました。

いつもならこのあと懇親会があるところですが、昨夜のフェアウエルパーティで懇親会を兼ねましたので各先生方は大きな仕事を終えたあとの満足のご様子で解散しました。山崎会長はじめ各理事の先生方、特に会議組織委員長として開催までの間大変なご苦労があったことと思います佐藤千代子さん、ほっとした表情の中に、大分お疲れのご様子が見受けられ、このあと体調をくずされねばいいがと案じつつ総会場をあとにしました。

各賞と研究助成授与

吉岡弥生賞を受賞して

中野支部　倉島摂子

このたびはからずも吉岡弥生賞をいただく栄に浴しまして感激で胸一杯でございます。受賞の対象とされました事は①として社会福祉法人鶴風会の事業、即ち肢体不自由児の療育のための東京小児療育病院ならびに重症心身障害児のためにみどり愛育園と通所訓練施設、これらの事業が三十年に及び、ここ十年は理事長として障害児療育にいつも前向きに指導的役割を果してきた事。②としては財団法人脳性麻痺児を守る会が二十年間に渉って果した一月一回の休日の無料診療、脳性麻痺の正しい理解を多くの人々に講演会、集会を通してわかりやすく話す。この診療と講演の大半を講師として奉仕して事業推進につくした事。この二点を高く評価くださって賞をいただいたと存じます。

思えばこの二つの福祉事業は三十年前、故龍知恵子先生が主となって、女医として母として当時行政も手をつけなかった脳性麻痺児のために筆舌につくしがたい困難に打ちかってこの子らの療育の場として東京小児療育病院を設立しました。さらに原因究明のため脳性麻痺研究所も併設しました。一方偏見と無理解の脳性麻痺という疾病に正しい認識を社会一般の方々に知ってもらわねばと、無料診療と広報講演の場「財団法人脳性麻痺児を守る会」を設立し、二つの福祉活動を三十年前に深い洞察力をもって今日を予知されたのでございます。

この福祉事業を多くの方々がご協力下さっております。守る会の目的は十分に果して昭和の御代とともに財団を解散しました。その時の理事長は小俣喜久子先生でございます。龍知恵子先生、小俣喜久子先生ともに日本女医会会長、副会長という要職を歴任された大先輩、私は深いえにしの糸で結ばれて先輩方の福祉に対する灯を消すまいと、ひたすらにがんばっております。今は老朽化した施設を三年間かけて改築し、難治性疾患のこの子どもたちが療と育の場を得て、現在一番良いとすめられている療育を行いたいと願っております。

大変光栄な賞をいただき、さらなる勇気が出てまいりました。今までも日本女医会の先生方には陰に陽にお力添えをいただきました。向後ともご指導くださいませ。まことに意をつくせませんが、お礼の言葉といたします。

荻野吟子賞をいただいて

北海道支部　今野タイ

このたびは思いもしなかった賞をいただき、ただただ汗顔の思いでございます。全国津々浦々にご立派なお仕事をされておられる方々や、世に知られず多くの困難を乗り越え、地域医療のために活躍なされておられる方がたくさんおられると思います。私など特に何もせず、ただ長い年月を過してきたにすぎないのにと思っています。

今は世の中も変って来ました。たしかに何十年も昔はいろいろな苦労もありましたが、今は社会福祉制度も全く昔とは違いますし、交通も整備され、へき地ではなくなりました。ちょっと車を走らせれば中核病院もありますし、病診連携により新しい医療知識も得ることができますので、若い先生からいろいろとお教え頂けるし、楽になりました。ひたすらに地域の方々とのふれあいを深くして家庭医に徹していますが、十四人の職員にも恵まれ、ひまのない毎日ですが、医者みょうりにつきると思っています。そして一日一日を今日は自分の命日と思いつつ精一杯動けることは幸です。

人それぞれに生き方はちがいますが、私は都市にすんでいる自分の子どもにはわからない生きがいでもあります。

新緑の霖雨にけむる峠道

五月二十七日産業医として営林署の山の現場のテントまで巡視に行きました。山道を十キロ余の白樺林の峠道をジープで、その時ふと出た句です。お笑いください。

花はまだ三分咲きなり桜もち

いろいろとご努力いただきました方々に厚くお礼申しあげます。まだまだがんばります。

学術研究助成を頂いて

東女医学内支部　小国美也子

今回は学術研究助成をいただき、ありがとうございました。

「歌舞伎メーキャップ症候群」は、一九八一年、新川先生と黒木先生が発表されて以来、世界各国から報告されています。この疾患の顔の特徴は、歌舞伎役者のくまどりをした目によく似た目（下眼瞼の外反）と、外側⅓が欠損している弓状まゆ毛であり、その他小奇形を合併し、手掌紋にも特徴があります。

現在、この疾患の原因としてDNAレベルでの研究が数施設でされていますが、まだその手がかりもみつかっていません。

今回私たちは、この歌舞伎メーキャップ症候群に色素性乾皮症を合併している例が多いことに注目し、この二つの疾患のDNAレベルでの異常が臨接して存在しているのではないかと推測し、研究を進めてゆきたいと考えております。

DNAレベルでの異常にどこまでせまれるかわかりませんが、精一杯取り組んでゆきたいと思っております。

学術研究助成金をいただいて

東女医学内支部　楠元雅子

この五月に行われました第5回国際女医会西太平洋地域会議のご成功を心からお喜び申し上げます。お忙しい中を一致団結され、多大の労力を惜しまれませんでした皆様方のご努力の賜物と思われます。会に参加させていただきましたものとして深く感銘いたしました。

このたびは日本女医会の学術研究助成をいただけることになりまして大変有難く、厚くお礼申し上げます。私は「高齢者心疾患の薬物療法に関する研究」をテーマに応募させていただきました。

高齢者社会を迎え、臨床診療の場では高齢者の比率が増加の一途をたどると思われます。中でも循環器の治療の主軸は薬物療法になります。しかしながら、高齢者の、特に七十五歳以上の症例に対する薬物療法に関する研究は少なく、明確な治療指針は示されていないのが現状であります。

高齢者ではその生理機能は加齢に伴い変化しており、さらに複数の合併病態を抱えている症例が増え、副作用も出現しやすくなってきます。薬物動態や反応性は若年者とは異なっており、これらは個人によっても著しい差異があります。高齢者では特に個人個人の病態に合った治療が望まれるわけです。また、今後は単なる疾患の治療のみでなく、QOL（Quality of life、生活の質）や経済性も考慮した医療が要求されています。

現在、私どもは虚血性心疾患、心不全、不整脈の外来および入院症例について、各種薬剤の使用状況、その年次別変遷、有効性や副作用、急性期および長期予後、QOL、血中濃度などを高齢者と若年者とにおいて比較検討しております。これらの年齢による差異が生理機能や合併病態とどのように関連するかを検討し、高齢者の循環器疾患における、薬剤の種類の選択、用量および用法についての治療指針を明確にしたいと考えております。

少しでも第一線の診療に携わっておられます先生方のお役に立てるようにがんばるつもりでおります。

今後ともよろしくお願いいたします。

学術研究助成をいただいて

文京支部　佐中真由実

平成五年五月二十三日京都で開催された第38回日本女医会定時総会において、第13回日本女医会学術研究助成を授与されましたことを、身に余る光栄と心から感謝させていただきます。

研究課題は、「糖尿病におけるポリオール代謝の研究――とくに妊娠時における 1,5-anhydroglucitol（1,5-AG）の血中・尿中動態に関して」であります。

1,5-AG は生体内に存在する最大のポリオールであり、一九七二年 Pitkanen（Finland）により糖尿病で低下する事が発見されました。その後日本において、その生理的意義、測定法、臨床応用など独自の研究が推し進められ、糖尿病において血糖コントロール悪化時に低下、改善に伴い増加し、耐糖能異常を鋭敏に反映することが明かにされています。このため糖尿病のコントロール指標、

吉岡弥生賞推せんについて

平成五年吉岡弥生賞授賞の適格者を、本会理事または支部長宛にご推せんくださるようお願いします。

締め切り期日は、本年十二月二十五日までに願います。

なお次の書類を添えて、ご推せんをお願いします。

一、自筆履歴書

二、業績

イ　医学に貢献した現会員。

ロ　社会に貢献した現会員。

三、推せん理由

スクリーニング指標として用いられている物質です。

しかし、妊娠時には妊娠経過とともに低下するため、血糖コントロール指標とならないことを我々は発見し、また動物実験において妊娠時の血中1,5-AGの低下は胎児への移行が一因であることを証明しております。

人において、妊娠時における1,5-AG低下の病態を明かにすることが、本研究の目的であり、妊娠前から糖尿病のあるインスリン依存型糖尿病（IDDM）およびインスリン非依存型糖尿病（NIDDM）の妊婦を対象として血中1,5-AG、尿中1,5-AG、分娩時母体血中および臍帯血中1,5-AGをガスクロマトグラフを用いて測定中です。

ガスクロマトグラフを用いた1,5-AGの測定は日本で防衛医科大学校の吉岡教授らのグループ、東京大学の赤沼宏史教授らのグループにより独自に確立されました。私は、大森安恵教授が紹介の労をとってくださり、防衛医科大学校にて、小児科教授吉岡重威先生のご指導、ご好意のもと、1,5-AGの測定をさせていただいております。

東京女子医科大学では、大森安恵教授が昭和三十九年にはじめて糖尿病妊婦の出産を経験されて以後、すでに四〇〇児以上の出産があります。糖尿病と妊娠の分野において日本の第一人者であられる大森安恵教授のご指導のもと、臨床および研究をさせていただくことが出来ました。糖尿病の婦人が、母体合併症の悪化、新生児合併症のない妊娠を全うするには、妊娠前に母体糖尿病合併症の検査・治療を行い、さらに妊娠前から血糖コントロールをほぼ正常に保つことが重要であります。「より良いコントロール指標を見つけたい」という皆の願いが今回の研究につながりました。

このたび学術研究助成をいただけましたのは、大森安恵教授、吉岡重威教授はもちろんのこと、妊娠班の諸先生方のおかげと心より感謝いたしております。さらにいただきました学術研究助成を励みに、糖尿病の女性のために、糖尿病と妊娠に関する臨床・研究を続けたいと考えております。

▼学術研究助成を受けるにあたって

文京支部　武内ゆみ子

このたび、貴会の平成五年度学術研究助成者に選ばれ、誠に光栄に存じます。心から感謝申し上げます。

私の研究歴もはや十数年、さまざまなできごとがありました。実は貴会の助成を受けるのは二度目、昭和六十一年に「T細胞の分化・選択的増殖機構における胸腺の役割に関する研究」というテーマで最初の助成をいただいております。当時、免疫学全盛時代、米国留学より帰国後二年の私は研究意欲に燃えていました。ようやく助手になったものの、研究費も学内での共同研究者も得られず、一人深夜まで悪戦苦闘していました。助成を受けたことで仕事にはずみがつき、翌年から継続して科研費がとれ、英文論文も出るようになってゆきました。学外から、順天堂大・奥村、八木田先生、放医研・鈴木先生、東海大・垣生先生などの力強い学問的応援を得て、今日まで、研究者としては充実した時代を過ごすことができたと思います。

六十一年はまた、私が第一子を出産した年でもありました。日増しに大きくなってゆく下腹部をみながら、果してどのように仕事と子育てが両立できるものかと思いめぐらしていましたが、この頃は、翌年ひと息つく暇もなく第二子を妊娠してしまったことに気づいたとき程の不安はありませんでした。研究と並行して試行錯誤の子育てがありました。自閉症のようになってしまった長女の相談にカウンセラーを訪ねたこともありましたが、安らかな我が子の寝顔は生活者としてのよろこびでした。多くの人々の暖かな手があり、仕事を継続することができました。今春長女が小学生、育児も第二ラウンドといったところです。

免疫学も変わりました。長い間その中心課題であった「T細胞の自己認識能の獲得の機構」は分子の言葉で語られるようになり、今は、胸腺外T細胞分化や接着分子、神経免疫へと分散化、移植免疫など、より臨床に近い分野が今後進展すると思われます。私自身はもともと血液学の臨床からスタートしたのですが、研究の路線がようやく臨床に近づいてきたように思えます。

女性が女性としての人生をやってゆきながら研究活動をし、個性豊かな男性の研究者たちと研究組織を組んでゆく困難さは、今後の時代でもさして変わりないのではないかと思います。私自身は力仕事ではたちうちできないので、諸外国や男性の研究者が見落としてしまうようなところをきめ細かく拾って主題に迫るという方法でやってきたと思います。女性の視点を生かした医学、生物学があるのではないかと思っています。

ただ全力疾走する年齢を超えて、ゆとりある視点から、医療、研究、後輩の育成につとめ、後続する人々に道を拓きたいと願っております。

重ねがさね、助成有難うございました。

▼学術研究助成を賜わり

神奈川支部　田中悦子

このたびは、学術助成を賜り、ありがとうございました。私事ですが、東京女子医大卒業後、同大学循環器内科学教室に十年余臨床医として勤務し、その後基礎医学に転向、現在東京慈恵医大生理学教室に勤務、心筋生理学、特に興奮収縮連関、カルシウムイオン動態の研究をしております。基礎医学に転向した後初めての助成授与であり、ひときわうれしく感じました。

臨床医として勤務中は、循環器学の中でも特に不整脈を専門にしてきましたが、不整脈の中には細胞内カルシウムイオンの増加が発生の主要因であるものが知られています。また、心筋壊死のあるものは、その発生機構の主要部分が細胞内カルシウムイオン動態に関わっています。細胞機能の多くはカルシウムイオンによって調節されていますが、特に心臓病の病態においては、上述のように細胞内カルシウムイオン濃度の増減が中心的役割を果している疾患があります。このような理由もあり、心筋カルシウム動態の研究を始めたわけですが、その一環として、今回助成していただいた研究計画を立てました。その概要を紹介したいと思います。

細胞内カルシウムイオン濃度は、カルシウムイオンの細胞内への流入、細胞外への除去、細胞内貯蔵庫からの放出および取り込み、収縮蛋白系への結合と解離などにより調節されていますが、これらのプロセスのあるものはエネルギーを必要とし、温度依存性が高いことが知られています。そこで、温血動物心筋細胞を対象に、カルシウム動態に対する温度の影響を解析し、細胞内カルシウムイオン濃度調節に関与している生理機構、特に細胞内に増加したカルシウムイオンの除去機構の解明を目的としました。心筋細胞には四つのカルシウム除去機構（ナトリウム－カルシウム交換機構、細胞膜と筋小胞体のカルシウムポンプおよびミトコンドリア）がありますが、エネルギー依存性はそれぞれ異なるので、灌流液の温度を変え各温度によって主に作動し、カルシウム除去に寄与している機構を解明したいと考えています。

第14回学術研究助成のご案内

会員の学術研究に対し助成事業を行なっております。希望者がありましたら、応募要項にしたがって、事務局あて申請下さるようお願い致します。

一、助成の趣旨

医学分野の発展向上を図り、後進の研究助成を目的とする。

二、助成金額

一件三十五万円（～五件）

三、申込手続

(1)応募資格

入会継続三年以上経過した日本女医会会員で個人、またはグループ（ただし、グループ研究においては会員が研究推進の中心的役割をになうものであること）

(2)助成期間

一年を原則とする。同一人が重ねて申請する場合は、三年以上の間隔を置く。

(3)応募方法

本会所定の用紙に、黒インキまたはワープロで記入。

一通を提出（用紙は事務局へ請求のこと）

(4)申込期間

平成五年十二月二十五日(土)必着

(5)選考および発表方法

選考委員会において選考の上、平成六年三月開催の日本女医会理事会において決定し、申請者宛通知する。

(6)助成金の贈呈

平成六年五月開催の日本女医会総会の席上。

(7)受賞者の本会に対する義務

平成七年三月末日までに研究経過報告（B5原稿用紙三枚）と助成金使途についての簡単な収支報告を提出すること。

(8)送り先　日本女医会本部　〒150　東京都渋谷区渋谷二―八―七　電話　〇三―三四九八―〇五七一

荻野吟子賞推せんについて

平成五年　荻野吟子賞　授賞の適格者を、本会理事または支部長宛にご推せんくださるようお願いします。

締め切り期日は、本年十二月二十五日、候補者の経歴、業績と推せんの理由を記載し、推せん者の氏名、捺印をもって提出してください。

▼学術研究助成をいただき

世田谷支部　蓮沼智子

このたびは、学術研究助成対象者に加えていただき誠に感激しております。現在、私は聖マリアンナ医科大学難病治療研究センターに籍を置き、西岡久寿樹教授のもとで慢性関節リウマチの原因を解明するため研究をさせていただいております。諸先生方もご存知のように、慢性関節リウマチ患者は現在のところ全国に約五十万人おり、年間一万五千人ずつ発病しておりますが、その原因は未だはっきりとは解明されておりません。最近では金療法、Dペニシラミン等の古典的な抗リウマチ剤以外にかなり症状をコントロールできる免疫調節剤、免疫抑制剤が開発されて、以前に比べればだいぶ病気の進行を食い止めることができるようになってきました。しかし結局いずれも根本的な治療ではなく、徐々に症状は進行し、寝たきりになるか人工関節置換術を余儀なくされる患者さんも少なくはありません。

現在私たちの研究室では、西岡教授により見いだされたHTLV-I（Human T Lymphotropic Virus type-I）による関節炎、HAAP（HTLV-I associated arthropathy）を中心に

研究を進めて参りました。その結果、このウイルスのtaxという遺伝子が関節の滑膜細胞の増殖能を高めることがわかってきました。この疾患を慢性関節リウマチのひとつのモデルとして考え、慢性関節リウマチでも滑膜の増殖を起こす遺伝子が存在し、一連の滑膜増殖、骨破壊、免疫異常を引き起こすのではないかと現在研究を行っております。

今回の研究助成金授与の対象となった事に恥じぬよう、ますます努力を重ねて参りたいと存じます。誠に有難うございました。

第5回国際女医会西太平洋地域会議

国際会議を終えて

会長　山﨑倫子

第5回MWIA西太平洋地域会議を終え、国内外の会員の先生方におめでとう、とてもよかった、のお言葉を頂き、今は心地よい疲労感と満足で一杯です。

東京に本部、京都で開催という困難な中、無事、成功裡に終了できましたのは、会員諸先生方からの早くからのご協力、ご支援とお励まし、それに組織委員長佐藤千代子先生を中心に委員一同および京都支部長松本文絵先生の一致団結と努力によるものとただただ感謝いたす次第でございます。この際、二三、私の感想をつけ加えさせていただきます。

今回、中華人民共和国（People's Republic of China でMWIA未加盟国）から参加希望の要請があり、台湾（ROC中華民国、MWIAの加盟国）との間のデリケートな政治関係から、四ヵ月にわたり複雑でややもすると感情的な折衝をねばり強く続けて参りました。その結果、片やメンバー国China Taipei、片やオブザーバーChina Beijing として二つの中国から参加していただくことが出来ました。北京からは厚生次官、台北からは衛生大臣が出席されました。もちろんお二人とも女医です。ウェルカム・レセプションでは二つの中国代表たちが肩を組んで仲よく合唱してくれました。世界の一角で女医たちによる一つの中国が生まれたことを心から喜び涙がにじんできました。このことは私のセンチメントだけでなく世界のすべての国々の加盟を願っているMWIAにとっても喜ばしいことでした。

次にフィリピンから日本への入国のむずかしさをとことん思い知らされたことです。フィリピンからの日本入国ビザが取れなくて、最後の最後までフィリピンの来日は不安定でした。

外務省、在フィリピン日本大使宛くわしく手紙やFAXでお願いしましたが、なかなかビザ発行担当領事まで事情が伝わらず、毎日のように電話連絡し、イライラの連続でした。在マニラ総領事が私を覚えていてくださり（一九八四年ナイロビ世界婦人会議にご一緒した方）早急にビザ発行手続きを進めてくださり、すべて皆さん来日された次第でした。気苦労の多い眠れない夜の連続でしたが、最後はめでたしめでたしでこの面でも満足しているところです。

社交行事や接待については佐藤組織委員長、担当理事、松本京都支部長が念には念を入れて下さり、学術委員会は実にスマートにまた完璧にすべてを実行、また遠く徳島からは女医と友好を深め、さまざま語りあえた有意義な機会を喜んでいるなど海外の参加者からのメッセージをいただいています。先ほど中華人民共和国衛生部副部長何界生女史から、FAXが届き、第5回MWIA西太平洋地域会議に出席させていただいたお礼、盛会をお祝いする。台北の女医たちと友好的接触が出来たことを喜ぶ、国際女医会に加盟の準備をはじめる。将来北京でおあい出来ることを期待している、とのことでした。

We have done it!! 私たちやりました!! が最終的感想です。お名前こそ挙げませんが、再度会員のおひとりおひとりに心からお礼を申し上げます。有難うございました。そして最初から最後まで慣れない面倒な仕事を、一生懸命やって下さった事務局の皆さんご苦労様でした。そしてありがとうございました。

会議は終る

第5回国際女医会西太平洋地域会議
組織委員長　佐藤千代子

外つ国の客人迎え　古都の会議に
心の満ちてかえるうれしさ
（三神美和名誉会長）

今回の会議を終えまして、ご参加いただきました日本始め各国の皆様、そしてご協力賜わりました日本女医会々員の皆様に心からの感謝を申し上げます。会議が始まりますまでどのくらいの先生方がご出席いただけるのか、経費の方は…と会の規模に思いがけなく阿波踊りの指導者〝れん〟をお連れ下さるなど、またその蔭にあってコンベンション・サービス特に沓沢さんの見事な準備と期間中の手くばり、などなど皆さまのご協力ですべて順調に運ばれました。

国際会長Dr.ウォード、副会長Dr.デイゾンも共に大感激、こんな素晴しい会議はなかったと、タイ、エジプトの女医たちも参加できてよかった、最高の会議でした、有難う、といって帰られました。ニュージーランドの会員も、まだ興奮が治まらない、とても素晴しかった、次は私たちの番です、ぜひ大勢で来て欲しいとのことでした。オーストラリアの女医からの礼状には、学術セッションの運営の手際のよさとペーパの内容の質の高さは特に印象的でした。また夜の行事の数々の素晴しさ、最高に楽しかった日本女医会の主催したこの会議を私は生涯忘れることはないでしょう、同行した娘も日本の若い

左からDr. Ward国際会長、山崎女医会長、Dr. Dizon副会長

西太平洋地域会議会場

かかわらず主催者共通の不安と危惧で落着かない日を過しました。しかし早速日本女医会会員千名近くの方からご寄付をいただき、どんなにか力強く嬉しかったことでございましょう。学術部担当の先生方のご努力で、基調講演の講師も決り、国内、国外から一般演題も続々集まり、この時点でよし、出来る!!と自信を持つことが出来ました。

会議のすべてについてはプロシーディングを作成いたしますので詳細につきましては報告を省略させていただきます。今回の会議が大成功だった!こんな会は今後リジョンではなかなか出来ないでしょう、と国際会長始め外国会員の方、そして日本女医会の先生方からの慰労のお言葉は、私どもにすべての労苦を忘れさせていただきました。そのお言葉をそのまま嬉しく頂戴させていただきまして、さてその原因は何であったかと考えました、感謝をこめて幾つかを述べると、

(1) テーマ「高齢化社会における医療」が時宜を得た、しかも各国共通の医療問題であったこと。そのためリジョン所属の女医会員のみでなく、エジプト始め五ヵ国から特別参加があった。（計十一ヵ国）

(2) 基調講演も地球規模の視野で先見性に富んだお話であり、私どもにあらためて思考の方向性を示唆された。

(3) 一般演題はいずれもそれぞれの専門性に立脚した発表であり、今回の会議における主軸の意義を十分に発揮したものであった。会議の数日後、A新聞全国版に第5回国際女医会西太平洋地域会議において一会員から有意義な論文の発表があったと、相当大きく内容が紹介されていた。今会議が学術会議として評価を受けたことは嬉しいことである。

(4) 運営面として、適確迅速に組織委員会の意を受け、疎漏なく運んでいただいたコンベンションサービスのスタッフ。宿泊変更、会場確保その他宴会手配等懇切に対応していただいたJTB、そして新・都ホテルスタッフのスマートでソフトなサービス、それと共に地元京都支部松本支部長始め皆様方の蔭のご配慮、ご手配、特に会期間中のみならず、一年以上にわたる日本女医会事務局職員の努力、期間中英語担当としてお願いした小泉さん、それぞれの総合戦力が相乗し大きな力を発揮したと思う。

(5) 今回の会議では出席者のほとんどの方が学術会場を埋め、熱心に研修されたこと、ワークショップの会場にいたっては入りきれないほどの超満員であった（会場設定の際予測を誤ったことは反省）。

(6) 山崎会長始めバイリンガルの会員の方々がその能力を十二分に駆使していただいて、会議の流れ全般をスムーズに運んでいただいたこと。これは特筆すべきことと思う。

(7) さて懇親会

まず舞妓さん三人に迎えられての入場に歓声、初日はディゾン副会長提唱によるインターナショナルナイトでしたが、フィリピン会員によるダンス、韓国会員のコーラス、あとは予定も無くどうなることかと思っていたら、次々と壇上へ上ってそれぞれの国の歌の大披露となり、日本も即席の大集団でコーラス!! 歌声は会場一杯に広がり女医仲間の楽しさで溢れた。宴終了後のナイトツアーでは、格式の高いお茶屋さんでの花魁ショーに外国会員の方々は驚きの連続であった。

二日目は、松本京都支部長の早くからのご企画で、十二単の着付ショー、この会議の議長であるディゾン国際副会長がモデルとなり、束帯姿の親王様と並んで大満悦（よく似合っていました）、会場から感嘆しきりの頃合いも良く、京都府知事、京都市長ご来臨、市長は医師でありお二方のご挨拶も格調高く、国際会議の雰囲気はいやが上にも盛上った。と、突如賑やかなお囃子につれて阿波踊りの「ごちゃ連」登場。プロの挑発に乗って浴衣姿のウォード国際会長を先頭にたちまち通路は阿波踊りのリズムで埋まった。四国の会員のお世話でF病院の揃いの法被五十着もお借りして俄か仕込の手ぶり足ぶり、笑いながら踊りながら交流の渦は大きくなるばかりであった。

三日目はがらりと趣向を替えてシンセサイザー、演奏者の巧みなトークと素晴しい音楽に陶酔し、各国のメロディが流れる頃には感激もひときわ高まり、始めは遠慮がちに通路でリズムにのっていたグループがつぎつぎと壇上まで駆け上りフロアはダンスで埋まり時を忘れ、別れを惜しんだ。

最後のパーティで司会をさせていただいた私は組織委員長として、今夜は英語でご挨拶をしようと大決心をして一緒に司会をしていただく平敷先生にその旨宣言をし、前夜ひそかに暗記しました。しかし司会台に立った途端、一生懸命ご応援いただいた日本女医会の先生方のお顔が眼前に迫り、思わず「ここは日本!日本語で挨拶しよう!」と突然変心し、折角の苦心の英語を呑み込んでしまいました。

外国からの皆さまにと、京都の潮田先生から老人施設の入居者の方々が作られた色紙のくす玉、広島の長尾先生から和紙の芸術作品の「まり」をたくさんいただいたことも感激でした。

組織委員の先生方のご努力は言うにおよばずですが紙面の限りもあり、ただただすべての皆さまに感謝いたします。そして終始心の支えとなってくださいました三神名誉会長先生に心からお礼申し上げます。

国際女医会西太平洋地域会議の開催地をお預りして

京都支部長　松本文絵

「私は昭和二十八年大阪女子医大卒です。四年前日本女医会に入会、現在京都支部長の役を預かっています。

このたび日本女医会による〝国際女医会・西太平洋地域会議〟がJR京都駅南側の市立アバンティ・ホールを中心に五月二十日(木)より、二十二日(土)まで催されることになりました。参加国は日本・韓国・台湾・フィリピン・オーストラリア・ニュージーランドおよびオセアニア地域、さらにオブザーバーとして中国・タイなどから〝老い〟について考えましょうという目的と、友好親善を深めるためにKYOTOにお集りです。お話によりますと、日本で催される国際女医会は今回が二回目だそうで、前回は十八年前、美濃部東京都知事の絶大なバックアップにより、語り草になっているほど盛大な会だったようです。しかしこのたびは、平安遷都一二〇〇年をひかえ、さらなる不況下では〝ミノベさん〟の時のように甘えられる環境ではありませんが、〝今度はぜひ京都で…〟との外国の方々の希望で決まったようですから、地元としましては、その責任の重さを感じています。

もともと日本女医会というのは、東京女子医専の同窓会を母体として発展して参った経過から、他の系列からの参加がむずかしい雰囲気があった時もあったそうですが、現在は全く左様なことはありません。それよりもNHKテレビ小説〝ええにょぼ〟では京都府内伊根町出身の若い女医さんが毎日元気な顔を出すばかりでなく、本年度の各医大では、女子学生が入学者の三分の一を占める（昨年香川医大は二分の一でした）状況にあります。つまり十年後の医療現場では、向学心にもえるパラメディカルの女性たちを含め、女医をとりまく環境はさらなるものがあると考えます。

このたび、はからずも京都において女医たちの国際会議が催されますことは、またとないチャンスと存じ、あえて府医師会員名簿より、女性会員（四九〇名余り）にご参加いただきたくご案内させていただきました。

実のところ、おたがい女医の現状というのは、それぞれの医療現場で〝守一隅〟が限界だとは思いますが、しかしこれからの新しい時代の流れの中で、自分の悩みを、自分のやりたいと思うことを、ホンネで語り合える場が求められる刻だとも思います。守ることから〝照一隅〟にするためにナニを考え、どう行動すべきかが、問われていると思っています。云々」これは次のような理由により府医師会報の声の欄に投稿したものです。

①は、前々から十分すぎるほど根まわしをしていましたので、府医師会から、この開催を預かる者たちのために、ポンとはゆかないまでも遠路はるばるおはこびの方々をお迎えするお花を、飾って頂けると信じていました。しかし〝女医会って知らんナァー〟別に貢献度もないし…ということで、何もしてもらえなかったのです。府医師会員三六〇〇名の中の五〇〇名におよぶ女医について一名の理事も役員もいない現状を含め、何を考えてるの!! とは思いましたが、判ってもらう努力しかないんだ……と思ったからです。

②は、京都支部をお預りした時、会員四一名は少いナァーと思いましたが〝京都は何かと重たいところで、メンバーの中には女医会は何をしてるのか判らんし、年会費八〇〇〇円もモッタイナイ。三年放っておいて安楽死しよう〟といったり〝国際会議やゆうて、受付やお茶くみなんか、せんならんのやったらイヤヤ〟ということまで聞かされ、ガクゼンとしたためです。

結果的には〝ゴメンナ。盛会だったらしいナ。こんどは何かさせてもらう…〟と頭をかきながら話してくれた役員。

一般女医会員からは、女医会に入りたい。女医会には入らないが、当日は参加したい。当日参加もできないが登録費だけでも出させてね。ガンバッテーというのまでありました。思い切って投稿してみて良かった…というのが感想です。

私の祖母は慶応生まれでしたが、英語の詩をそらんじていましたので女学校に入ったらしっかりやろう…と思っていました。しかし〝英語の先生のオキニイリ〟というイジメに合い、その年、真珠湾攻撃があったこともあり、外国語アレルギーは聾・唖・失明の三重苦です。そんな私が国際会議の裏方になること自体、ナンセンスだった上に、東京という本拠地を遠く離れ、万事に不案内なこの京都での開催が、どんなに不安なものであったか想像に余りあるものがありました。

この欄をお借りして、万事に不行届で、目だるかったことと存じますが、何卒あしからずお許し下さいませ。今後とも一層のご指導たまわりますようお願いいたします。

十二単のモデルは国際会議議長のDr.Dizon

第5回西太平洋地域会議を終えて

学術部

平成五年五月二十日―二十二日まで京都で開催されました「国際女医会第5回西太平洋地域会議」も滞りなく終了し、一安心しているところです。会員の皆様には多数ご参加いただき有難うございました。学術部と致しましては、会議のテーマに沿った基調講演、一般口演、ワークショップのプログラムを組み、抄録集を作ることが最大の課題でした。特に日本で行うという特殊な環境の中でしたので、英語と日本語の二本立てのものを作成しなければなりませんでした。経費節約の中、出来るだけ日本からの演題には英語、日本語両方の抄録の提出をお願いいたしましたが、外国からの抄録も含めて学術担当理事が英訳、和訳をいたしましたので、中にはお気に召さない箇所があったかと反省しております。ご了承ください。ワークショップ以外は京都アヴァンティホールで、同時通訳付きで行われました。

はなやかな民族服の韓国女医会のコーラス

歓迎レセプションのコーラス（指揮は青森支部長前田慶子先生）

基調講演は、佐藤秩子先生（愛知医科大学客員教授）に「日本における百寿者について」、松原純子先生（東大医学部助教授）に「二十一世紀の環境と健康リスク」というテーマでお話しいただきました。

佐藤秩子先生は、病理学者の立場から、加齢に伴う生理的・病理的変化を基礎に、疾病の予防、治療により寿命延長は可能であること、本質的な老化には男女差はないこと、疾病の発現様相には遺伝的要素、栄養条件を含む環境要因が関与していること、これらの改善による老化の制御、寿命延長への希望について、見事な英語でのご講演でした。

松原先生は、疫学専攻の立場から、健康を脅かす危険要因は環境など外側からの要因（たとえば地球的環境破壊の促進、交通事故、産業事故など人為的災害の増加、新手の微生物による健康被害など）及び人間自身の作り出す内側からの要因（ストレス、健康の恒常性保持の困難性、有害要因に対する抵抗力の低下など）があること、リスク科学の社会的役割など、人間生存と環境対策についてお話しくださいました。

一般口演は、五月二十一日(金)午後一時三十分より五時十五分までと、二十二日(土)午前十時から十二時までが当てられ、二十四題の口演が行われました。国内から十五題、韓国から三題、台湾から二題、オーストラリア、イギリス、エジプト、中国から各一題ずつでした。内容はインスリン自己免疫症候群遺伝子解析のような基礎的研究から、加齢に伴う疾病、老人福祉問題等社会医学的研究まで広範囲にわたるものでありました。参加各国は人口構成の高齢化が大きな社会問題であることを訴えていました。

ワークショップは、五月二十二日(土)午前八時十五分から九時四十五分まで、①高齢者の画像診断、②高年齢女医の医療活動および社会活動、のテーマのもとにホテル京阪内の二つの会場で行われました。この会場には同時通訳が付きませんでした。

ワークショップ①では(1)Magnetic Resonance Spectroscopy（MRS）により脳の代謝状態を *in vivo* で知りうること、アルツハイマー病ではN―アセチールアスパルテート（NAA）が側頭葉の皮質で減少することから、臨床応用の可能性が高いこと、(2)顔面形成外科にコンピュータシミュレーションが導入されていること、(3)肺癌に対してCT、MRIが強力な診断機器であること、の三話題が国内研究者から発表され、台湾から、頭部、肺、心臓、血管系、腰椎まで高齢者の画像供覧があり、参加者一同に高齢者を知る有益なワークショップとなりました。

ワークショップ②は(1)高年齢女医（日本女医会会員）の医療活動および社会活動の現況、(2)高年齢女医の医療活動への提言という国内からの話題提供がありました。会場が狭く、予期した以上に参加者がありました。(1)は日本女医会が昭和二十六年卒より以前の卒業会員についてアンケート調査を実施し、その回答をまとめたものであります。八十五歳以上の女医の64％が医療活動を続けていること、八十五―八十九歳のグループに入る会員のうち25％は週のうち四日以上医療活動をしていること、アンケートに回答された六十二歳以上九十二歳までの日本女医会会員の91％が現役の医師として、しかも週間実働日数が多い医療活動に従事している実態が明らかにされました。これは外国参加者にも強い関心を引き、定年制の問題とも絡めて活発な討論が行われました。

(2)は糖尿病、胃・十二指腸潰瘍、脂肪肝、痛風、花粉アレルギー等多くの疾患は食事療法で治癒すること、女医は団結して食生活改善活動に参加するよう提唱されました。英語の資料がなかったので、外国からの参加者の討論が少なかったことは残念でありました。

会議参加者は、外国から七六名、国内から二四七名でしたので、学術部は満足しております。

（文責：橋本葉子）

武田病院見学に参加して

神奈川支部　矢崎宏子

思いがけなく、申込み損ねていた病院見学のグループに参加させていただくことが出来、武田病院見学が出来た。なぜ、私立の武田病院見学なのか？と不思議に思いながら、画像診断用機器を主として見学するということで案内していただいた病院は駅の近く足の便のよい所にあり、中に入ってまず、待合室や廊下を往来するお年寄りをナースが労わりながら車椅子を運ぶその表情、患者の表情ともほぐれた様子に、ほっとした気持がした。狭い中を忙しく移動する人々の光景が、何ともアットホ

ーム的で、広い立派な病院はかえって患者が緊張してしまうのではないかとさえ思われた。画像機器は日進月歩で最新の物も取入れられているが、横浜でも公立病院等また私立医大附属病院の見学で最新の物を見せてもらっているのでさほどびっくりはしなかったが、その機器を逸早く脳ドック等に取り入れ、実際に活動していることが何とも羨ましかった。横浜も「横浜から脳卒中をなくす研究会」が発足して間もなく三回目を迎えるのだが、脳ドックなくして脳卒中をなくすことは不可能に近い。心電図を診るように、脳の状態を予知する方法を日常診療に利用出来たらとの思いがホームドクターとしての私の課題であるので、一個人医から病院→総合病院→臨床研修医教育機関にまで発展された武田病院の在り方に心から感激した。

後で頂戴したパンフレットを読むと〝思い遣り〟の心で医師、看護婦、職員一同懸命の対応をされていることだった。体系化をしてしまう学問はし易いので、昔でも本は知識の墓場、患者から学べと沖中先生がいわれたが、〝人の病い〟一人一人を診ているという最前線の医師であるホームドクターとしての自覚と覚悟で、そのために死ぬまで、すべてのことから学ばねばならないという気持を新たに励まされる思いだった。

哀悼　三好美春先生

日本女医会常任理事三好美春先生は平成五年五月七日、胃癌のため逝去された。

通夜は五月十日、告別式は五月十一日に、共に荒川区西日暮里浄光寺で行われ、山崎会長が弔辞を読まれ、多くの役員が参列した。

三好先生は昭和三十三年東邦大学医学部をご卒業　地域医療にとりくまれ、この間十年以上にわたって、本会理事、常任理事としてご尽力。平成二年四月、胃の手術をされ、その後一進一退、人生八十年の現代、わずか六十歳で永眠されたことは、まことに惜しみても余りあることで心からご冥福をお祈り申し上げる。

社団法人日本女医会

東山サナトリウム見学の記

埼玉支部　田中蘭子

東山老年サナトリウムは、最先端の医療設備をそなえて高度な医療を謳う病院である。その設備、特に高速CT、超電導MRIなどを見学する目的で、第5回国際女医会西太平洋地域会議の初日、一九九三年五月二十日の午後、東芝メディカルの協力で一班十名ずつ二回にわたって訪問することになり、私はその第一班として山崎倫子会長のお伴をして、四人のタイのドクターを伴って出かけた。京都駅よりタクシーで約三十分、山科の北、東山の山裾に建つ褐色のビル群がそれであった。私にとっては、新しい機器、特にMRIの画像診断は、平敷教授の明解な語り口の学術講演で何回か勉強させて頂いたし、たまたま昨年身体の不調でMRIの経験をしたので目新しい感じではなかったが、タイのドクターたちには珍しいものであろうと、院長を始めとするスタッフの方々の説明を伺ったが、機器の内容および画像の理解は少々難しかったのではなかったろうか？

はたして、入院の環境、つまり病棟の見学もとの希望が出されたので、途中からコース変更をしていただいた。病棟は大きなガラス窓が廊下側にはめられて、病室内が歩きながら見渡せるように設計され、清潔な環境ではあったが、ベッドはすき間なく配置されて、寝たきりで動けない病人であるとしても、介助する方も窮屈ではないかとの感じを持った。院長の話では、外来は全くなく、入院のみで現在一五四七床とのこと、職員の数は聞き洩らしたが想像するだに気が遠くなる思いがした。

ちなみにベッドの回転、つまり死亡数は一ヵ月に三十人から四十人、年間五百人近いと聞いた。かなりの死亡率である。その理由として近年入院患者の超高齢化があると言われた。さもありなんとは思ったが、一瞬、特養ホームの様相と比較してしまった。リハビリの部屋には人影がなく、ただいま散歩の時間と聞いて屋上に案内された。高く金網を巡らし、人工芝様の敷物を敷いたスペースは、かなりの広さがあり、はるかに山科の街を見下す眺望も開けて、夜景はさぞやと思わせられた。折から日射しが強く、五月にしてはかなりの気温であったせいか、日蔭のベンチに同じようなパジャマ姿の老人たちが並んでいた。〝こんにちわ〟と声をかけると何人かが答えてくれたが、おおむね無表情で、痴呆のレベルは不明であった。

一ヵ月の費用は？　とのタイのドクターの問に、老人保健法による一部負担金が二万円強、おむつ代六万円、お小遣いその他四万円、平均して十二万円くらいという答えであった。私はまあそんな所だろうという感覚で聞いたが、タイのドクターはどのように思われたのか聞き洩らしたのは、見学の案内役としては不手際であったと反省している。

駅のそばという地の利、本当の臨床医（グレードの高い）日野原先生曰く、医者は聖書・哲学書から一般週刊誌、ポルノ誌までも読んで云々（慈恵大総長阿部先生）など人間味あふれる人の利、科学の粋である医療機器の発達の利を備えた京都武田病院のますますの発展を祈り私たちも病診連携を通じそのような病院が一つでも多く育ってほしいナァと願いつつ。ありがとうございました。

公開講演会開催依頼について

各支部におかれまして公開講演会を開催して頂き、各地の実情に合ったテーマ、演者、日程を組んで、公衆衛生活動にご参加下さいますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

各支部から開催のお申し出があれば、資金、演者派遣などご希望に応じて、協力させていただきます。

事業部

東山サナトリウム第二班

神奈川支部　稲生襄

第二班は八名で行った。少々補足させていただく。

東山サナトリウムは昭和三十年開設、当初は結核のサナトリウムであったが、結核療養施設が斜陽となり精神科に変った。四十四年から老人医療も併設したが、五十三年からは老人医療一本となり、ターミナル・ケアの形をとっている。

老人福祉法に応じ、六十一年から近代化計画をし、平成までに完成したとのことである。一五四七床入院可能であるが、七一七床は老人の精神科、八三〇床は一般老人との事。しかし現在はナースの数に相応した一二〇〇床が使われている。二十四時間完全看護体制なので、家族の付添いは一切不要で、医療を要するものは医療中心の病棟に移すようになっている。

在院患者の平均年齢は八十歳、男性より女性が多い。死亡しても引取り手のない人が七〇パーセントと聞いて驚いた。

入浴洗髪は週二回、一病棟に必ず一つ浴室がある。紙おむつも使用しているが、ネルの布も使っており、その洗濯に二人で三時間はかかる。

東山サナトリウム入口

院長を囲んで説明を受ける

院長は六十歳前後と見受けられ、バリバリと働いておられる。当サナトリウムは一〇万平方メートルという広大な地にポツンとあり、花と緑につつまれ、すばらしい環境で、拡張しようと思えばいくらでもできるらしい。都塵を離れて、まことに恵まれた地であった。

胸にこみあげるもの

神奈川支部　土屋和子

五月二十日京都における国際女医会に参加のため、女赤髭先生と佐伯輝子先生とひかり車中の人となった。天気もよく幸先よい旅が思われ、車中も楽しかった。京都新都ホテルに到着、登録をすませロビーに入って見ると、華やいだ明るい雰囲気の中で各国語の会話が入り混り、既に会議の成功がうかがわれた。貴重な研究発表が数多く行われたが、私にとっては基調講演①愛知医科大学教授佐藤秩子先生の「日本における百寿者について」が非常に興味深く印象に残った。

演壇に立たれる各国教授方がおかっぱやおさげ髪の若い方が多く、堂堂と講演されるのを見て誠に今昔の感に耐えなかった。

二十日、二十一日、二十二日と夜は賑やかなパーティが行われた。二十一日の催しは皇太子御成婚にちなみ、衣冠束帯の公達と十二単のお姫様が登場し、壇上でその着付が披露された。外国人のモデルのお姫様は十二単を脱がされた時大きく手を拡げ口をあけてやっと開放されたしぐさで皆を笑わせた。続いて賑やかなお囃子にのって阿波踊り、本格的な指導者の下で、一同会場を踊りめぐり、和気藹々の雰囲気がもり上った。

二十二日のお別れパーティの夜は世界的名手によるシンセサイザーの演奏があり、いつの間にか誰からともなく踊りはじめテーブルはほとんど空の有様で楽しい一夜であった。

この夜私のテーブルに韓国麻痺科の教授が居られたが、女学校まで日本語を使われた由で、流暢な日本語でいろいろとお話を伺った。「戦時中の慰安婦の問題を今ごろになって持ち出し悲しい時代を想い起こさせる人たちを私は本当に情なく思っている。ことに本人ならまだしも本人は亡くなっているのにまわりの者がさわぎ立てる姿は何とも見苦しい。お互いに悲しい過去は忘れて仲よく力を合わせて前進しましょう」と熱心に話しておられた。

会が終りロビーに出た時、後から抱きつかれた方があった。振り返って見るとこの韓国の先生であった。「お名残惜しいから私はさよならはいわない。必ずまたお会いしましょう」といわれた眼には涙が光っていた。私も思わず胸にこみ上げるものがあった。この感激が今度の参加の一番大きな収穫であり一生忘れ得ぬものとなった。

このパワーを若い人へも

大阪7支部　阪口昌子

はてさて、果して会議に参加したといえるのかどうか、問題が残るのです。というのは、参加したのは歓迎パーティとフェアウェルパーティだけなので。一人で開業してまだ日が浅いので、学会のために診療を休む勇気はなく、木曜と土曜の夕方に参加したのですが、それが偶然二つのパーティだったのです。

木曜日（二十日）は登録が主な目

的で、登録をすませ、昭和二十年生まれの私が、ほんとの若者に見えてしまう構成人員に戸惑って帰りかけました。その時偶然、枚方医師会の先輩の米田先生とお会いして、パーティに誘っていただき、諸先生方を紹介してもらいました。いろいろな方と話している間に、ここに出席されている方々は、精神的に溌剌とした方ばかりとわかりました。人には、実年齢と肉体年齢、精神年齢があり、実年齢は仕方ないとして、他の二つはその人によって何とかなることがよくわかりました。お話しを伺っていると、医者をしながら家庭を築いて活躍されている方は、子育ての時にはほんとに筆舌に尽しがたい努力をされたようです。それができて当然と本人も回りの人も思っていた時代だったのですね。でもこれからはそれでは両立できない人が増えてくると思います。理解と協力のうえに増えてくるならいいのですが、実情は医者にさえなればそれ以上の努力から逃げてしまう人がいるからです。

これは現在の教育制度、特に偏差値が生んだ大きな弊害なのです。偏差値が高い、いわゆる勉強のできる子が、それに合う医学部を選ぶ—自分が医療というものに理想を見つけ、一生の仕事とするために医学部に入った頃と比べて、何という選択の仕方をするのだろうという人が結構多いのです。もちろんこういう人ばかりではありませんし、女子だけがそうだとはいいません。男子にも同じ傾向があります。しかしまだ世間では男子は仕事を持つという意識が支配していて、卒業して「アレッちがう!!」と思いつつも医者として働いている間に自覚が出てきて成長していきますが、女子はお茶やお花の免許と同じように医師免許をとる者がいるということなのです。今まで女医会が、理想的ななくなり方をする時代がきっと近いうちに来ると思っていたのに、この調子ではいつまでも必要となってきます。

話しは逸れてしまいました。さてどちらのパーティでも国を越えてみなさん楽しんでおられた様子でした。なかでもフェアウェルパーティは、

ナイト・ツァー参加記

宮城支部　佐々木和子

「西太平洋——」のお話が出て以来、「えらい時期に、よりによって理事とは!」というのが正直な気持であった。上層部、地元京都及び周辺諸先生方の精力的なお取り組みとは裏腹に、私自身は頭も体もろくに働かせることも出来ず、責任者の一人たる自覚も熟さぬままに迎えたウエルカムパーティ。そして華麗に繰り広げられたそれもフィナーレを迎え、初日最終プログラム、ナイト・ツァーが始まった。こうした記事を書く破目になるとはつゆ思わなかったため、心してすべてに目を配っていたわけでない。従って以下には、正確な参加者数、参加者国籍、道順等々に関する資料としての価値は無いので、その辺り、あらかじめご諒承、ご勘弁いただきたい。

さて、二台のバスに補助席をもフル利用して分乗、夜の古都をまずは将軍塚に向った。時間が遅いせいか、一方交通の道でもあったか、山道に入ってからは対向車もなく、順調ほんとに楽しかった!! 「やっちゃん」という少し「おネー」ではないかと見えるシンセサイザー奏者の演奏のすばらしかったこと!! それに乗れるみんなの若いこと!! 彼はきっと驚いていたことでしょう。熟年パワーのすごさに。このパワーを若い人に伝えなくては、白け世代に何とか伝えていかないと……と少し焦ります。

学問の会はもちろん大切ですけど、アフター会議での交流によって、少しでも若い人たちの心を摑んでいけたらいいし、今日のようなパーティならきっとそれができると感じられました。

に頂に到着、下車して展望台に向ったが、足許が暗く、懐中電灯の二、三本も携行した方がよかったかと感じる。日中の大日堂庭園最奥の展望台とは違うせいか、百八十度の展望というわけには行かず、見物はあっさりと終わった。再び市街に戻り、さまざまな道筋を、そしてライトアップされた平安神宮、二条城を車中より見物させて貰った後、ツァーのハイライト、花魁見学のため、島原遊廓の遺構、京都指定文化財の輪違屋に向う。バスを後に小路に踏み入り、二、三分も歩くと、いかにもの門構え。遊廓の二本柱、置屋と揚屋の一方、置屋の輪違屋である。L字型に三室吹き抜けの座敷に集合し、全員片唾を飲む中に、太夫の登場となる。かつての太夫に備わっていた筈のきらびやかな衣の下の強かさ、気位、風格等々の雰囲気には欠けていたが、これは苦労知らずに育った現代っ子（二十歳とのこと）を使っての、昔の形をなぞらえるショーであるからに、当然といえば当然、同質を求める方が愚かしい。その代わり、間近かに見る今様傾城は、初々しく透明感に溢れて十分美しかった。こうした場合、一部冷めた気分で、彼女の日常生活での姿、所作等に不粋な想像を巡らせたくもなるが、この夜は目前の不思議な美しさを無心に堪能した。太夫によるお茶の振舞い、踊りを経て最後は太夫との記念撮影という段取りである。金は余れど厳しい統制下に擡頭、開花した江戸時代の軟い町民文化の唯中、そして完全な男性優位社会で、こうした分野以外、いかなる女性も表舞台に立ち得なかったという時代背景はあったにせよ、遊興の世界にまでこのような様式美を築き上げた当時の日本人には、感嘆したり恐れ入ったりの数十分であった。

外国からのお客人方は一様に目を凝らし（解釈の仕様は別として）、それは熱心に見学されていた。外人のみならず、我々日本人にとっても大変面白い体験であったと思う。置屋の客室、帳場、台所等も見て廻った。

"Japanese kitchen!!!" と台所には特に興味が集まったようである。語学にたけていたなら、今少し説明を補足したり、生のご感想を伺えたものをと、今でも少なからず残念に思っている。

帰途に着く頃になって、急に空腹と口渇を覚え、解散と同時に同行の先生方とコーヒーショップに駆け込んでいた。椅子に落ち着くと〝よかった、よかった！ 初日は大成功であった〟との思いがこみ上げて来た。

以上が、おこぼれにあずかって同乗した一会員の感想記である。

最後に、このツァーを企画され、遅い時間帯にもかかわらず、〝そこを曲げて……〟のご交渉に当たられた裏方の地元諸先生方、業者の方々のご苦労に、心からのお礼を申し上げねばならない。本当にありがとうございました。

理事会議事録

日　時　平成5年3月27日(土)
　　午後3時30分より
場　所　日本女医会会議室

出席者
山崎、佐藤、青井、石原、稲生、白浜、中濱、二村、橋川、橋本、小田、川田、栗原、佐々木、田中、南雲、松井、丸茂、森田、吉崎、大原、土井、藤岡　（以上23名）

欠席者
白橋、野呂、野本、平敷、三好、明石、小出、佐野、関口、野澤　（以上10名）

庶務報告
吉崎理事
以下、別紙どおり報告。——承認

会計報告
栗原理事
平成4年2月分収支別紙どおり報告。——承認

各部報告
【広報部】　中濱常任理事
・3月22日　第一三四号会誌割付完了。
【事業部】　白浜常任理事
・3月17日、年金について安田信託銀行、事業部、会計部、庶務部との会議を行う。
・年金の見直し時期その他については今後検討する。
【学術部】　橋本常任理事
・第7回ワークショップ、第16回学術講演研修会について、日程・内容ともに未定、西太平洋地域会議終了後検討。
・3月17日(水)、第13回学術研究助成審査委員会開催。
授与者6名決定（審査対象者9名）
1　小国美也子（東女医学内支部、S62・6入会）
「歌舞伎メーキャップ症候群に関する遺伝子工的的基礎研究」
2　楠元雅子（東女医学内支部、S62・4入会）
「高齢者心疾患の薬物療法に関する研究」
3　佐中真由実（文京支部、S48・3入会）
「糖尿病におけるポリオール代謝の研究—特に妊娠時における1,5-anhydroglucitol（1,5-AG）の血中・尿中動態に関して—」
4　武内ゆみ子（文京支部、S60・8入会）
「VLA-4, VLA-5分子の造血・リンパ球分化に果たす役割」
5　田中悦子（神奈川支部、S51・3入会）
「心筋細胞内Ca動態の温度依存性に関する研究」
6　蓮沼智子（世田谷支部、S62・9入会）
「慢性関節リウマチの病因遺伝子に関する研究」
以上6名

平成5年度事業計画案および予算案
（事業計画案）
庶務部—女医会81支部を数ブロックに分け地域会員の増加、活性化を図る。
学術部—ワークショップ、学術講演研修会を検討し国内各地域で開催する予定。
事業部—年金利率の見直し。
年金事務作業のコンピュータ化に着手。
（予算案）
各部より提出された要望額について別紙のとおり検討。

定時評議員会、定時総会議題について
・議題、式次第、担当役員について検討し、別紙のとおり決定。
・女医会のブロック区分（地域会員の増加、活性化のため）について、および事務所の移転問題については議事に載せず、各々「その他」の項目で討議する。

平成5年度役員会開催日について
・別紙のとおり決定。
・平成6年定時総会は東京にて開催（役員改選）。
・平成7年定時総会は埼玉支部に依頼する。

東京女子医大地域保健研究会より、事業計画案を添え平成5年度地域保健活動に対し30万円の助成援助依頼あり。
検討の結果、30万円の助成を決定。
以上
副会長（庶務部担当）　佐藤
石原、二村、南雲、吉崎

理事会議事録

日　時　平成5年4月17日(土)
　　午後3時30分より
場　所　日本女医会会議室

出席者
山崎、佐藤、白橋、青井、石原、稲生、白浜、中濱、二村、野本、橋川、橋本、平敷、小田、栗原、佐々木、関口、南雲、野澤、松井、丸茂、森田、大原、土井、藤岡　（以上25名）

欠席者
野呂、三好、明石、川田、小出、佐野、田中、吉崎　（以上8名）

庶務報告
南雲理事
以下、別紙どおり報告。——承認
追加事項：山崎会長より会長著書「回想のハルビン」の寄贈あり。

会計報告
佐々木理事
平成4年3月分収支別紙どおり報告。——承認

各部報告
【広報部】　野澤理事
・4月14日　第一三四号会誌初校会議。
【事業部】　白浜常任理事
・西太平洋地域会議および平成5年度定時総会期間中ルーペンダンの販売を行う。
・三井健康保険組合より機関誌への原稿執筆依頼あり。
平成5年度より原稿執筆（健康に関する内容）
【学術部】　平敷常任理事
・平成5年定時評議員会会場にて「日本女医会学術部活動に関するアンケート」調査を実施する予定。
別紙配布資料に基づきアンケート内容について検討する。

平成4年度収支計算および平成5年度予算案
別紙送付済み資料に基づき検討する。

総会について
1　定時総会、定時評議員会次第について
別紙のとおり決定。
2　会務報告案について
別紙送付済み資料に基づき検討する。

西太平洋地域会議について
・山崎会長より西太平洋地域会議組織委員会事務（英語）を担当する小泉智子氏の紹介あり。
1　日本万博協会より、西太平洋地域会議補助金内定通知あり。
（要望額八四〇万円に対し、二〇〇万円の補助）
提出書類について検討、記入内容については佐藤組織委員長に一任。
2　5月20日「ナイトツァー」のコースとして「輪違屋」を加える。
3　佐藤組織委員長より記念品の皿の提示あり（見本）。
4　5月20日の歓迎レセプション次第決定。
5　京都までの往復乗車券等は各自で手配する。
6　5月19日、午後5時よりホテル京阪にて記念品の袋詰作業を行う（会場：「桜の間」の予定、夕食を用意）。
以上
副会長（庶務部担当）　佐藤
石原、二村、南雲

評議員会議事録

日時　平成5年5月23日(日)
場所　ホテル京阪（京都市南区東九条西山王町31）
午前10時00分開会
司会　二村芙美江
社団法人日本女医会評議員会開催に際し
評議員数　一一四名
出席数　六六名
記名委任数　一四名
白紙委任数　一一名
以上のとおり日本女医会定款第27条の定足数に達し、評議員会が成立する旨の報告あり開会を宣す。

会長挨拶　山崎　倫子

報告
1　会務および事業報告　吉崎喜美子
配布ずみの資料にもとづき報告。
2　平成4年度特別会計報告　佐々木和子
吉岡弥生賞基金会計
国際女医会議記念事業基金会計
年金会計
ルーペンダン会計
以上について配布ずみの資料にもとづき報告。

議長選出
斉藤歌子　（議長着席）

議事録署名人選出
守屋孝子　井上柳子

議事
第1号議案
1　平成4年度一般会計収支計算書　栗原　久子
配布ずみの資料にもとづき説明
――原案どおり可決
2　剰余金処分案　栗原　久子
――次期会計へ繰り越すことを原案どおり可決
会計監査報告　土井　淑江
監査の結果適法かつ正確であることを認める旨の報告あり。
第2号議案
平成5年度事業計画案　庶務部　佐藤千代子
会員増加推進
地域別ブロック制の設定
吉岡弥生賞
事業部　佐藤千代子
医療過疎地診療奉仕活動への助成
公衆衛生活動
支部助成
荻野吟子賞
年金
ルーペンダン
社会保険新報社への原稿協力について　月刊「いきいき」
三井健保組合機関誌への原稿執筆
渉外部　佐藤千代子
国内および国際交流
広報部　佐藤千代子
機関紙の発行
学術部　田中　蘭子
研究助成
講演研修会、ワークショップ
以上
庶務部地域別ブロック制については検討の結果、本年度は提案するにとどめ、継続審議とする。その他事業計画案については原案どおり可決。
第3号議案
平成5年度一般会計収支予算案　青井　禮子
――原案どおり可決
第4号議案
次期及び次々期総会開催地について　山崎　倫子
次期開催地　東京
次々期開催地　埼玉支部
――原案どおり可決

閉会の時
午前12時00分閉会　白橋　美笑

会員動静

新卒入会（敬称略）
神奈川支部　藤井亜砂美
愛知支部　冨田裕乃

入会会員（敬称略）
青森支部　浅井瑞枝
宮城支部　千葉　潤
埼玉支部　岸　弥生
千葉支部　林　雅意
江戸川支部　梅澤美和子
大田支部　岩平佳子
文京支部　岡　恵子
目黒支部　松橋有子
愛知支部　五味道子
大阪2支部　菊井知子
大阪5支部　栗山啓子
京都支部　小川靖子、山田千冬
愛媛支部　白石憲子
福岡支部　坂本雅子、崎村桂子
高木攝子、高木郁江
丸木陽子

物故会員（敬称略）
品川支部　妻木エミ子
山梨支部　中山美津恵
兵庫支部　美川ヒサエ

編集後記

梅雨あけの待たれる今日この頃でございますが諸先生方には、お元気にご活躍の事とおよろこび申し上げます。

長雨のための各地の被害、政府においては国会解散、選挙、G7サミットなどなど話題の多彩な日々でした。日本女医会にとりましても、第5回国際女医会西太平洋地域会議、第38回日本女医会定時総会と一大イベントを恙なく終了することが出来たという満足感と安堵感でいっぱいのことと存じます。

三神名誉会長、山崎会長、佐藤組織委員長をはじめ組織委員の皆様方が心を一にして、それぞれの部で誠意をもって責務を遂行されました賜と感嘆するとともに、その結集力は如何ばかりか、「ここに日本女医会あり」のすばらしい成果を発揮することができ、ご同慶の至りに存じます。

今号の会誌は、それぞれのお立場でのすばらしい原稿を、ご多忙中にもかかわらず早速お寄せいただき、賑々しく紙面を飾ることができ、よい思い出となることと存じます。

最後に、私こと今回ワークショップを担当させていただきましたが、多数の会員の先生方にはご多忙中をアンケート調査にてご協力を賜わり結果を発表させていただきました。紙面の都合上、次号でぜひご報告をさせていただきますので何卒よろしくお願い申し上げます。ご協力に対し、心よりお礼申し上げます。

（野澤）

平成5年7月20日　印刷
平成5年7月25日　発行
編集人　稲生　襄
発行人　日本女医会
発行所　東京都渋谷区渋谷2－8－7　青山宮野ビル
社団法人　日本女医会
☎三四九八－〇五七一
制作　東京都文京区水道1－5－16
株式会社　金剛出版